

旅の手帖から

祈りと微笑

原田奈翁雄



祈りと微笑

旅の手帖から

原田奈翁雄



著者紹介

原田奈翁雄（はらだ・なおお）

1927年、東京に生まれた。52年3月から78年11月まで、筑摩書房につとめ、編集の仕事に従った。数多くの単行本、シリーズ、少年図書などを刊行し、また雑誌「人間として」「展望」「終末から」などの編集長もつとめた。79年11月から、一荃書房で仕事を始めた。

著書に「終末からの出発——人間を信じようか」（明治図書）、「絶望を退けるいとなみ」（一荃書房）、「職業としての出版人」（共著、中経出版）などがある。

祈りと微笑——旗の手帖から

1979年12月15日 第1刷発行

定価 1400 円

著 者◎ 原 田 奈 翁 雄

発 行 者 大 野 進

発 行 所 株式会社 たいまつ社

〒160 東京都新宿区百人町 1-23-14

電 話 03-371-1590

振替 東京 4-24362

印 刷 日本製版株式会社

<落丁・乱丁本はおとりかえます> 直接注文の場合、送料当社負担

祈りと微笑

——旅の手帖から

原田奈翁雄

祈りと微笑——旅の手帖から／目次

はじめに	人間は人間を愛している	5
寺と少年	フィレンツェ	8
二つの大地	シベリア、そしてインド	38
ヨーロッパの町を歩く	コペンハーゲンからローマまで	56
ヒッピーに寄せる思い	アメリカ、そしてインド	92
少年の目	明日の世界	105
祈りと微笑	アジアへの開眼	125
あとがきに代えて	いい旅をするための若干の用意	150

装丁

後藤
一之

はじめに

——人間は人間を愛している——

海の外へ出かける人は、毎年何百万人にもものぼるという。いいことだ。小さな島にとじこめられていた私たち日本の民衆が、広い世界に出て異質なものと出会うことによって、目を見開かれ、考えの幅を押しひろげられるならば、この島国の様相も少しづつは変わってくるだろう。積み重ねられる体験の総量は、ともかく莫大なものにちがいないのだから。

日本語以外にことばをもたず、いずれも突然に、何の用意もなしに出かけた短い旅ではあったけれど、最近三回にわたった私の旅は、それぞれにかけがえのないいい旅だったと思っている。

いくつか旅のメモを書いたのは、私の受けた感銘が、まったく予想を裏切り多様でかつ深いものだったからだ。その感銘をまとめてひとことと言うならば、地球の上、どこに行ってもすばらしい人間たちがいる、ということの発見だった。そして人間は、人間をとても愛し

ているのだという事実を、ことばや想像を介するまでもなく、私の全感覚、全精神をもって実感しえたことだ。

だが、この地球上には、私たちあたりまえの人間が、あたりまえの平安としあわせのうちに生きていくのを妨げる問題が、いまも現にいっぱいにある。愛する者たちから引き裂かれ、いのちそのものをおびやかされている無数の民たちが、この瞬間にさえ、地上の各地にあふれているとさえ言わねばならない。

なぜこんなにまで心やさしい民たちが苦しまなければならないのか。殺し、殺されさえしなければならぬのか。旅にあっても、また自分の暮らしに戻りたいまでも、その問いは私を離れることがない。各地の人びとの顔を、その日常の暮らしのさまざまな背景をふくめて、あざやかに思い浮かべることができるようになっただけに、私の思いは痛切である。時として、暗い気持ちにおそわれないではいられない。

だがしかし、と、いま私は思い直すことができる。かれら、そして私たち無数の民たちは、みないちように生きることを愛しており、他の人間が生きていることを、同じように愛している。ならば、どうして私たち人間に、よりよい未来を作り出せないことがあるのか、と。私たちあたりまえの人間が、地球上のあたりまえの暮らしをもつあたりまえの人間たちと、心のつながりを深く強いものにしていくことによって、それはかならず可能なのだ。地球の住民は、生物・無生物を含めた自然、それに依って生きる人間それ自体であって、断じて財

力や権力や、押しつけの信念でも理論でも、ましてやコンピュータや、核戦争をささえる科学技術でもないはずだ。

私の旅の小さな報告が、ことばも歴史も文化もそれぞれに異なる民衆どうしの連帯に、多少なりと役立つことになればと、心から願う。

そしてこれを読んでくださるあなたにも、折があればぜひいい旅をしてほしい、さまざまな人間たちに会ってきてほしい、と言ひ添えたい。

七九年九月

寺と少年

——フィレンツェ——

生まれて初めてする今度のヨーロッパ旅行に何か目的があったとすれば、それはただ一つにすぎなかった。ミケランジェロ、ダビデの像にフィレンツェで逢うこと。

そしてフィレンツェは一か月の旅の最後の訪問地であった。

ローマ、終着駅^{チルミ}を朝の十時過ぎに発った汽車の窓から見るイタリア農村の風景は、何と美しかったろう。日本を出発する前から、そして旅の中途でも、イタリアの貧しさと、イタリア人への悪口をさんざんに聞かされて、否応なく作られた不愉快な先入観も、すでに三日間滞在したローマの印象のすばらしい強烈さによつてすっかり打ち消されてしまっていたけれど、これでもかこれでもかと叩きこまれたこれまでのいやな思いを、こんなにまできれいさっぱりと裏切ってくれるとまでは思ってもいなかったのである。

コペンハーゲンを振り出しに、ポーランド、チェコ、オースタリー、ドイツ、スイスと進

ってきたのは、すべてまだ真冬、せいぜい浅春の季節の中であつた。ローマでは空に燕がいつぱいに舞い、カラカラ浴場遺跡の原には、麦の野生種ではないかと思われるような草の穂が柔らかく風になびいていたのだったけれど、汽車がローマ市街を出て、やがてそれほど小さくはない川に沿って走り始めると、あたりはすっかりもう初夏の風物詩を歌うのであつた。

黄色い菜の花、何と呼ぶのか、色濃い紫の花が畑に拡がり、まっ赤に開いてやさしくゆらぐのはけしの花であろうか、ほんとうに燃えるように群生し、また二つ、三つと点在して、やわらかく起伏する緑の上に強烈なアクセントを付けるのである。そしてその前景、背景の中に置かれるのが、これまたたとえばもう美しく美しい土と石の農家なのである。

一か月の旅の間中、バスや汽車から見た農家は、やはりほとんど例外なく美しい煉瓦作りであつたけれど、その色は一樣に薄茶の落着いたものに傾いていたように思う。ところがイタリアの煉瓦はぐんと明るい色に変わり、しかもそれに交じって組み立てに使われている石材も、白、緑、水色と多様になつて、実に軽やかな明るさに輝くのである。

イタリアが貧しいなんて、いったいどこの話だ！ 何という色彩の豊かさ、あふれるばかりの光だろうか。ゲートのイタリアへの旅を持ち出すまでもなく、北の国の人々が、古来この空をあこがれたのも当然ではないか。

私は氾濫する光と色彩の流れに酔い痴れて、車窓のガラスに額を当てつづけたのであつ

た。そして後にフィレンツェであの素晴らしい寺の建物を見た時に、それに重ねて私が自然に思い描いたのは、このイタリア農村にあふれる色彩なのであった。

*

フィレンツェに着いたのは、すでに午後二時を廻ってからであった。

駅からはど近く、サンタ・マリア・ノヴェルラ寺院前の広場に面して、その寺の脇に立つのが旅行社の予約しておいてくれたホテルであった。すっかり濃く色づいた芝生や、広場の中心から放射状に伸びた小径にベンチを置いて、多数の人びとが三々五々腰を下ろしている風景を見て、まず私たちは宿のいい位置を喜んだ。ずっと今まで、旅行仲間と一緒にのホテルに泊ってきたのだけれど、ローマからサルジニア島に行く彼らの一行と別れて、私たちふたりだけで初めてする旅中の旅であつたから、期待とともに少なからぬ不安もあつたのである。フロントでもらつた市内地図を調べて、妻と行先きのおおよその見当をつけた。言うまでもなく、何よりの目あてはダビデ像であり、次いでメディチ家の墓であつた。

広場に面した窓を開いて、さわやかに吹き込む風を楽しみながら私たちは下を見渡した。さまざまな髪色をし、さまざまな服装をしてベンチに倚る男たち女たち、子どもたち。鳩が彼らの足もとを歩み、舞い立っている。

ああ、フィレンツェなのだ、フィレンツェ——。私はこのことばを、見降ろす風景の中で静かに噛みしめた。そして、さあ、まちがいもなくダビデに、という思いを抑えかねてい

たのだ。

いよいよダビデに逢えるのだ、明日だな、今日だぞと、昨夜ローマの宿で寢床に入ってから以後、期待は急激に胸苦しいまでに高まってきていたのであった。

私がヨーロッパの芸術作品に初めて接したのは、敗戦を一年か二年隔てるにすぎぬころであった。ある新聞社の主催で泰西美術展というのが行なわれていて、およそゲイジュツなどというものとは縁もゆかりもない所で生きてきていた私が、なんでわざわざ上野の美術館のあんな展覧会などというものに出かけるめぐり合わせになったものか、いまもって不思議で仕方がないのだけれど、とにかくその会場の、ガラスのケースの中に、胸を抱いて前こごみに佇立する一つの小さな女人像に、すっかり心を奪われてしまったのが最初であった。もの心ついて以来、ずっと戦争の世の中に生きてきて、あとは肉体的な飢えと、敗戦後の精神的な自失状態を続けてきた少年にとって、それはまったく予期しようもない異種の世界に突如として触れる衝撃であった。

その彫像は「エヴァ」と名づけられ、オウギュスト・ロダンの作であると説明が付けられていた。もちろん、いずれも初めて目にする文字であった。私は胸苦しく衝き上げる興奮を抑えながら、その像の周辺をめぐって長い時間をすごし、翌日、受けた衝撃をたしかめるためにふたたびそこを訪れたのである。

私がこの小さなブロンズの像によって体全体に呼びさまされたもの、それを感動といって

いいのか、強烈な力をもってゆり覚まされた新たな一つのイメージとっていいのか、それとも、ある名状しがたく微妙に立体化された深い思想の直覚とっていいのか、私にはなお定かではない。とにかくそれ以後も決して何度も味わうことのなかった異様な体験であることは確かであった。

あそこにあつたもの、立つ位置によっては、緑の外光を、そして観覧者の動く影を映すにすぎぬガラス・ケースの中に、身じろぎ一つせず、凝然と佇ちつくしているもの、あれはいったい何であつたのか。

いまそれをきわめて簡明な、きわめて集約されたことばで言おうとするならば、言つて言えないことはないのだけれど、しかしそれを他人に伝えることばとして考えれば、結局は何も言わぬに等しいかも知れぬと思われるのだが、なおかつ敢えて言うならば、そこに私が見出して胸おののいたものは、ただに「人間」だったのである。たしかに「人間」が、そして「人間」としか言いようのないものが、今までそれを見も知らなかった私の前に立つたのであつた。

人間などということばは、最もありふれて氾濫することばにすぎない。この地球上にあふれ返り、何よりもこの日本という土地に限ってみても一億も存在するものであつてみれば、ただ「人間」といつてみたところで、何ものをも特定せず表現もしないと言つて当然であらう。

だが少し言わせてほしい。ずっと戦中に育ち、十七歳でまったく予期もしなかった敗戦に遭って以後、なお茫然と自失しつづけているひとりの若ものにとって、実のところそのようなことは決して存在しなかったといってもいいものである。

臣民、草葬、天皇の赤子、醜の御櫛、そういうものとしてのみ自覚された私があり、また、一億一心百億貯蓄、一億一心火の玉だ、一億玉碎……これら国策スローガンに抱えこまれた一億分の一としての私があり、そしてただ天皇、上御一人の前にまったく同様な存在として一億の戦友、同胞があるのみであって、一方その私ないし私たちに対して、鬼畜米英、紅毛毛唐があり、チャンコロがあり、赤鬼ロシアがあつたにすぎない。つまり天皇のため、君国のために死すべきわれわれがあり、殺すべき奴ら、敵があるのみのこの世界なのであつた。

もちろんすでに敗戦からしばらくの時を経ていたのだから、私の中にいままで生きてきた世界に対する疑念がまったく芽生えていなかったわけでもなく、また、新たに、しかも不本意きわまりない形で押しつけられつつあった別の世界からの風に対して、身をとざしつづけていたということもはやなかったではあろう。

しかし何の用意もなしに私の触れた一箇の小さな彫像は、一瞬の激発ともいふべきおそろしい勢いをもって、一挙に、ためらうことなく、私の胸中深く、〃人間〃という一つのことば、ゆるぎない一つの観念を、実に青銅のかたまりという重い実体をもってぶち込んだので

ある。

——人間だ、これが人間というものなのだ。何とせつなく身をこごめる姿であろうか、これは。人間になってしまった、嘘もいつわりも、裏切りも、背信も、そして何よりも同じ人間を殺し殺して殺しつくしてやまぬ血ぬられた欲望をさえも、自らの裡に孕んで抑えかねる人間。狡智の実を食べてしまった己が恥辱と悔恨に肩を押しつぶされて、両腕に虚しく自分の胸を抱くより術なき者、原初のひと、イヴ。まぎれもない人間。そしてそれはまた私自身であるのではないか。——胸苦しさにふとんを抱いてころげまわるほどの夜々を私は持たねばならなかった。

それ以来、私はいままで触れたことのなかった世界に、ひよわな足を運ぶことになった。文学や芸術の世界に。そして日々を生きるなま身の自分、また自分を取り巻く現実世界とそことの絶え間ない往還のうちに、まさに「人間」というものと久しくつき合いつづけているのである。

ミケランジェロには、もちろんロダンを通じて導かれた。中でもそのダビデ像とは最も深くなじみつづけ、私の所有する一枚の写真はほとんど三十年にわたって身近に置かれて私と対面しつづけ、ロダンと共に私をささえ、私を育ててきたのであった。

私の最も敬意と畏怖と共感をもって見る「人間」はダビデであり、その背後に、いやそこにこそ立つミケランジェロなのであった。